

問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

たとえはどんなにおいしい食事でも食べられる量は限られている。腹八分目という昔からの戒めを破って食べまくったとしても、食事はどこかで終わる。いつもいつも腹八分目で質素な食事というのはさびしい。やはりたまには豪華な食事を腹一杯、十二分に食べたものだ。(1)「これが浪費である。浪費は生活に豊かさをもたらす。そして、浪費はどこかでストップする。」

それに対し消費はストップしない。たとえばグルメフォームなるものがあつた。雑誌やテレビで、この店がおいしい、有名人が利用しているなどと①セン伝される。人々はその店に殺到する。なぜ殺到するのかと訊くと、「だから」「あの店に行ったら」と言うためである。

当然、セン伝はそれでは終わらない。次はまた別の店が紹介される。またその店にも行かなければならぬ。「あの店に行ったが」と口にしてしまった者は、「ええええ、この店行ったことないの?」知らないの?」「言われるのを嫌がるだろう。だから、紹介される店を延々と追い続けなければならぬ。」

(2)「これが消費である。」(3)「消費者が受けてくれているのは、食事という物ではない。その店に付与された観念や意味である。」

浪費と消費の違いは明確である。消費するとき、人は実際に目の前に出てきた物を受け取っているのではない。(中略)なぜモデルチェンジすれば物が売れて、モデルチェンジしないと物が売れないのかと言えば、人がモデルそのものを見ていないからである。「チェンジした」という観念だけを消費してしまふからである。

ボードリヤール(中略)は消費をわたる観念の例として、「個性」「注目している。今日、広告が消費者の「個性」を煽り、消費者が消費によって「个性的」になることをもとめる。消費者は「個性」をなければならぬという強迫観念を抱く(いまの言葉ではむしろ「オンラインワン」といったところか)。

問題はそこで追求される「個性」がいったい何なのかだれにも分からぬというところにある。したがって、「個性」はけつて完成しない。つまり、「消費」によって「個性」を追い求めるとき、人が満足に到達することがない。その意味で消費は常に「失敗」するように仕向けられている。失敗するということより、成功しない。あるいは、到達点がないにもかかわらず、どこかに到達することがもたらされる。こうして選択の自由が消費者に強制される。

消費社会を相対的に位置づけるために、それは正反対の社会を紹介しよう。ボードリヤールも言及しているが、人類学者マーシャル・サリンスは「原初のあるべき社会」という仮説を提示している。これは現代の狩猟採集民の研究を通じて、石器時代の経済の「豊かさ」を論証したものである。

狩猟採集民はほとんど物をもたない。道具は貸し借りする。計画的に食糧を貯蔵したり生産したりもしない。なくなったら採りにいく。無計画な生活である。

彼らはしばしば、物をもたないから困窮していると言われる。そして、それは彼らの「未来に対する洞察力のなさ」こそが原因であると思われている。つまり、計画的に貯蔵したり生産したりする智慧がないために十分に物をもっていないとして、「文明人」たちから憐れみの目で眺められている。

しかし、(4)「これは実情から著しくかけ離れている。彼らはすくも困窮していない。狩猟採集民は何ももたないから貧乏なのではなくて、むしろそれ故に自由である。」きわめて限られた物的所有物のおかげで、彼らは日々の必③「品」品に関する心配からまったく免れており、生活を④「享受」しているのである。「

また、彼らが未来に対する洞察力を欠き、貯蔵等の計画を知らないのは、智慧がないからではない。彼らのような生活では、単に未来を思い煩う必要がないのだ。

狩猟採集生活においては少ない労力で多くの物が手に入る。彼らは何らの経済的計画もせず、すべてを一度に使い切る大変な浪費家である。だが、それは浪費することが許される経済的条件のなかに生きているからだ。

A 狩猟採集民の社会は、一般に考えられているのとは反対に、物があふれる豊かな社会である。彼らが食料調達のために働くのは、だいたい一日三時間から四時間だという。サリンスは、農耕民に囲まれていたけれども農業の採用を拒否してきた、ある狩猟採集民のことを紹介している。なぜ彼らは農業の採用を拒んできたのか? 「そうなればもっとひどく働かねばならない」からだと述べている。

B 狩猟採集民を過度に幻想化してはならない。狩猟採集民もまぐ食料調達ができないことはあるうし、環境の変化によって容易に困窮に陥ることはあるうし(しかし、農耕民の方がその可能性が高いとも言えるのだが……)。

重要なのは、彼らの生活の豊かさが浪費と結びついているということである。彼らは贅沢な暮らしを営んでいる。これが重要である。ボードリヤールやサリンスも言うように、浪費できる社会こそが「豊かな社会」である。将来への気づかいの欠如と浪費性は「真の豊かさのしるし」警況のしるしに他ならぬ。

消費社会はしばしば物があふれる社会であると言われる。物が過剰である。(5)「しかしこれはまったくの非がいがいである。サリンスを援用しつつボードリヤールも言っているように、現代の消費社会を特徴づけるのは物の過剰ではなくて稀少性である。消費社会では、物があふれるのではなく、物がなびき不足なのだ。」

なぜかと言えば、商品が消費者の必要によってではなく、生産者の事情で供給されるからである。生産者が売りたいと思う物しか、市場に出回らないのである。消費社会とは物があふれる社会ではなく、物が足りない社会だ。

そして消費社会は、そのわずかな物を記号に仕立て上げ、消費者が消費し続けるように仕向ける。消費社会は私たちが浪費ではなくて消費へと駆り立てる。消費社会としては浪費をわけては困るのだ。なぜなら浪費は満足をもたらしてしまうからだ。消費社会は、私たちが浪費家ではなくて消費者になって、絶えざる観念の消費のゲームを続けることをもとめるのである。消費社会とは、人々が浪費するのを妨げる社会である。

消費社会において、「IV」私たちがはめる意味で我慢をせらわっている。浪費して満足したくても、そのような回路を閉じられている。しかも消費と浪費の区別がなかなか思いつかない。浪費するつもりが、いつのまにか消費のサイクルのなかに閉じ込められてしまう。

この観点は極めて重要である。なぜならそれは、質素さの提唱とは違う仕方での消費社会批判を可能にするからである。

しばしば、消費社会に対する批判は、つましい質素な生活の⑤スライ獎を伴う。「消費社会は物を浪費する」「人々は消費社会がもたらす贅沢に慣れてしまっている」「人々はガマンして質素に暮らさねばならない」。日本でもかつて「⑥セイ賞の思想」というのが流行ったがまさしくこれだ。

そうした「思想」は(6)根本的な勘違いにもとづいている。消費は贅沢なこともたらさない。消費する際に人は物を受けとらないのだから。消費はむしろ贅沢を遠ざけている。消費を徹底して推し進めようとする消費社会は、私たちがら浪費と贅沢を奪っている。

しかも単にそれらを奪っているだけではない。いくら消費を続けても満足はもたらされないが、消費には限界がないから、それは延々と繰り返さねる。延々と繰り返さねるのに、満足がもたらさねないから、消費は次第に過敏に、過剰になっていく。しかも過剰になればなるほど、満足の欠如が強く感じられるようになる。

これこそが、二〇世紀に登場した消費社会を特徴づける状態に他ならない。

消費社会を批判するための⑦スローガンを考えるとすれば、それは「IV」贅沢をひきはなす「I」になるだろう。(國分功一郎「暇と返屈の倫理学」にみる。なお本文に一部変更がある)

問1 二重傍線部①～⑦について次の問いに答えなさい。

①・③・⑤・⑥では同じ漢字を使うものを、また②・④・⑦では最も近い意味を持つものの記号を1つ選択しよ。

①ゼンム

- ア 思索に沈ゼンする
- イ 託ゼンを受ける
- ウ 機ゼンを制する
- エ 周ゼン業を営む

②言及している

- ア 批判している
- イ 同意している
- ウ 黙認している
- エ 指摘している

③ギョク品

- ア 天ジユを全うする
- イ 批判を甘ジユする
- ウ 内ジユを拡大する
- エ 願いが成ジユする

④享受している

- ア 受け取って苦しんでいる
- イ 受け取って自分のものになっている
- ウ 受け取って利用している
- エ 受け取ってもてあましている

⑤スライ獎

- ア 無スライなまねをする
- イ 計画がスライ泡に帰す
- ウ スライ納帳を改める
- エ 彼の意図を邪スライする

⑥セイ賞

- ア 生徒に猛セイを促す
- イ 隔セイの感がある
- ウ 市セイの人を重んじる
- エ 血セイを投与する

⑦スローガン

- ア 格言
- イ 広告
- ウ 標語
- エ 警告

問2 傍線部(1)(2)(4)の指示語について。

それぞれの「これ」が指す内容として最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- (1) ア いくらおいしい食事でも食べられる量は限られているというところ。
 イ 腹一杯食事をして、どうしても余るものが出てくるというところ。
 ウ 普段腹八分目でもたまには豪華な食事を腹一杯食べるというところ。
 エ 腹一杯食べて食事が終わったとしても、またすぐ食べたくなること。
 (2) ア おいしい料理をひるまう店に入々が殺到すること。
 イ もっとおいしい店はないかと情報を集めること。
 ウ 誰よりもおいしい店を知っていると自慢したいこと。
 エ 得られた情報にもとづいて延々と店を巡ること。
 (4) ア 狩猟採集民は無計画な生活をしているというところ。
 イ 狩猟採集民は物を持たないから困窮しているというところ。
 ウ 狩猟採集民には未来に対する洞察力が欠けているというところ。
 エ 狩猟採集民が「文明人」たちから憐れみの目で眺められているというところ。

問3 傍線部(3)とあるが、では消費者が受け取っているものは何か。次の段落から二字で抜き出さない。

問4 傍線部(5)とあるが、「これが」まったくのまちがいである「理由」として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 消費者の意識が高まり、人々が稀少なものはかり求めるから。
 イ 消費者の欲しいものが多すぎて、生産が追いつかない状況だから。
 ウ 生産者が売るために都合のいいものしか市場に出回らないから。
 エ 生産者同士の競争が激しく、作り手に余裕がなくなっているから。

問5 傍線部(6)について、何が「根本的な勘違い」だというのか、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 人に我慢を強要して消費社会の発展を阻害すること。
 イ 賢沢をするよりも質素に暮らすことに価値をおくこと。
 ウ 消費社会は賢沢な社会だという前提に立っていること。
 エ 質素な生活で人間が満足できると軽く考えていること。

問6 波線部「I」とあるが、その説明として、最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 消費者が気にするのは、今食べている食事ではなく、次にどの店に行くか、そのための情報をどうやって入手するかである。
 イ 消費者が金を払って店で受け取るのは、実際の食事ではなく、その店と食事に関するセン伝や評判といった情報のみである。
 ウ 消費者が満足するのは、実際に食べた食事がおいしかったからではなく、自分が新しい情報の発信源となったからである。
 エ 消費者にとって価値があるのは、その店で実際に食事をしたことではなく、次々に与えられる情報に従って行動したことである。

問7 波線部「II」なのはなぜか。最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 「個性」を追いもとめることと自分が一時の流行に過ぎず、消費者が本当の「個性」を見いだしたところには、流行の中心が別のものへと移行しているだろうか。
 イ 流行を煽るために「個性」ということがきびに言われぬようになったが、「个性的」でなければならぬ人は、実際にはかくわすかでないか。
 ウ さかんにセン伝されている「個性」とは、消費を促すための記事に過ぎず、追いもとめて手に入るような実体があるかどうか、けっして分からないか。
 エ 画一的な情報をもとに「個性」を追いもとめても、別のだわかや同じにならぬばかりで、いつまでも自分の本当の「個性」を見つけられずに終わるから。

問8 波線部「Ⅲ」でいう「豊かさ」の内容として明らかにふさわしくないものを、一つ選び記号で答えなさい。

- ア 限られた所有物を有効に活用する。
- イ 計画的に食料を生産したり、貯蔵したりしない。
- ウ 手に入れた食料は一度に使い切る。
- エ 少ない労働時間で多くの物を手に入れる。

問9 空欄「A」と「B」を補うのに最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- | | | | | |
|---|---|-------|---|-------|
| ア | A | そもそも | B | それゆえ |
| イ | A | ところが | B | けれども |
| ウ | A | なるほど | B | だからこそ |
| エ | A | したがって | B | もちろん |

問10 波線部「Ⅳ」とあるが、どのような理由で「我慢させられている」のか。最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 浪費しようとする気持ちを抑えつけられて、こくわすかな物を手に入れるだけで満足するように強制されるから。
- イ 欲望がたえずかき立てられるため、何かを思う存分手に入れて満足したという気分を味わうことができないから。
- ウ わすかしくないものにみなの欲望が向けられるため、常にそれらを手し、満足できる人など存在しないから。
- エ 満足をもたらさず浪費と、もたらさない消費の間の区別があいまいで、自分がどちらをしているのが分からないから。

問11 波線部「Ⅴ」の意味として、最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 質素な生活でも贅沢に思える社会を取り戻すために、物質的な欲望はいっさい忘れなければならぬ。
- イ 過激になる一方の欲望を常に満足させることができなければ、豊かな社会とはいえない。
- ウ いつまでも消費し続けられる社会のためには、あり余るほどの商品が流通してはならない。
- エ 浪費のできない社会では、豊かな生活を送っているという満足感は味わえない。

問12 この文章の内容と明らかに合致しないものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ふだんは質素に暮らしていても、たまに浪費することができれば、その人の生活は豊かになる。
- イ 狩猟採集民が農業にたずさわることを選択しないのは、彼らが既に豊かな社会を実現しているからである。
- ウ 真に豊かな暮らしを送るためには、食料に困ることのないように計画的な生活を送ることが大切である。
- エ 消費社会では、人々は欲しいものを手に入れても満足することができず、常に欲望をかき立てられている。